

日本看護歴史学会 会報

日本看護歴史学会
第33号
1999年12月1日

第一三回大会の成果を繋いで

山本捷子

二十世紀で括られる時間は残すところ一年余。昨日に続く今日・明日ですが、時の節目を新しい出発点としたいというのは人の常で、本大会も「世紀を越えて、看護の未来」をテーマに、八月三十、三十一日暑い大阪で開催されました。テーマを受けて三つの講演が行われましたが、そのひとつは今年度から代表幹事の任を受け継がれた高橋みや子氏の「看護の未来——大学教育の現状と課題」でした。

看護系大学の急激な増加は、目を見張るものがあります。その背景には少子高齢化する社会と高度・多様化する医療保健福祉への対応策として看護の高等教育化があるのですが、優れたケア提供者の育成のための研究教育方法の開発や育成したCNS（専門看護職）が活動する場やその経済的基盤の整備、教育現場での教員不足の現状など、さまざまな問題点が提示されました。「現在は皮作りの段階、これからは内容の充実」と説かれ、今が日本の看護界のターニングポイント最盛期だと痛感したことでした。

講演の二は、遠藤恵美子氏の「看護の未来——新しいパラダイムの転換をめざして」でした。アメリカで生まれた看護理論について、人間—環境—健康—看護の枠組みからみた多様なパラダイムが、近年ロジャースやニューマンの人間と環境の全体論へシフトしていることが紹介されました。戦後、ヘンダーソンはじめ次々と紹介されるアメリカの看護理論を理解することに汲々としている身には、心が震えるような刺激が与えられた時間でした。人間全体を丸ごと把握、クライエントにとっては看護者も環境となる存在として関わるという新しい見方に、畏れおののきながらも、自ら思考する力の弱さを如何に克服するかが当面の課題ではないかと思ったことでした。

講演の三は、中島紀恵子氏の「看護の未来——福祉との接点」でしたが、律令制に始まる福祉の法制史から、現在の高齢化社会の介護保険制度、これからは社会・健康・福祉の視点から看護介護の本質としてケアリングの役割の重要性を強調されました。氏の講演は社会的視野から、ケアリングを再度見つめる機会となりました。

研究発表は四編で、仏教における看とり、「病家須知」、国立公衆衛生院の歴史、沖縄県の准看護婦問題、と興味深い内容が取り上げられていました。

分科会は、見戸明子氏（錦秀会准看護学院）の話題提供で、「オーストラリアの看護の歴史と高齢者ケアプログラムについて」をめぐって、二十人ほどの参加者が和気藹々と話し合いました。

総会では、第五期目の幹事が紹介されました。第一期目の返り咲きが多い幹事会ですがマンネリを脱し、新機軸の学会運営が期待されます。

来年は八月二十三、二十四日に秋田市にて開催予定です。多くの会員の方々と研究成果が参集されることを期待しています。

第一四回大会予告!!

◆開催期日

平成一二年八月二三日（水）

八月二四日（木）

◆会場

秋田県立文化会館分館

（ジョイナス）秋田市

◆研究発表の申し込みについて

研究発表を希望する方は、

・演題名と主旨百字程度

・氏名所属会員番号

・申し込み締め切り、平成十二年三月一五日（水）当日消印有効

・送付先

日本赤十字秋田短期大学

〒010-14

秋田市上北手猿田字苗代沢

一七の三

山本捷子宛

学会発表を終えて

長谷川愛子

(浜松医科大学附属病院)

十三年も歴史ある日本看護歴史学会に初めて参加させていただきありがとうございます。また、新卒である私に発表の機会を下さったこと、大変感謝しております。

『病家須知』・『達生図説』に見る日本の近世看護とナイチンゲール看護」というテーマで発表させていただきましたが、二年ほど前この二書を初めて目にし、その内容に驚き、感動し卒業研究として取り組んできました。

私は学生時代、看護の歴史に触れることは全くと言ってよい程ありませんでした。日本の看護技術について図入りで説明された書物が存在していたことさえ知られていません。

医療の現場に半年立って、日本的看護の在り方・方法も現場に活かされてもよいのではないかと思えます。

また、看護学生にも、このような歴史に触れるチャンス을設けてもらい、また良い点が現場に活かされていくようになればよいと思います。

私は日本の歴史・看護の歴史について、勉強を始めたばかりで、

まだまだ知識も薄く、内容も未熟ですし、専攻も絞っていく必要があります。皆様に御指摘いただいたことをしっかりと受けとめ、今後学習を重ね研究を進めていきたいと思っております。

学会に参加して

日下 修一

(東大大学院)

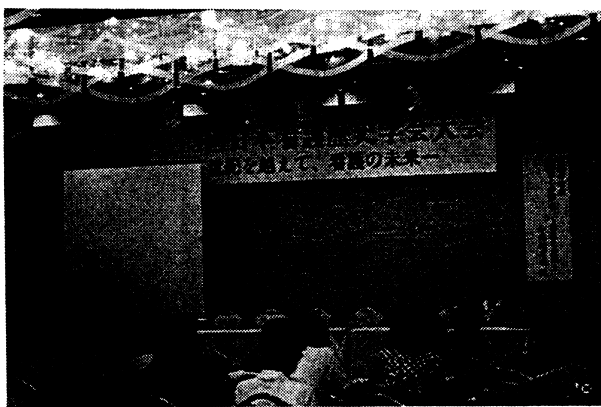
今春、学会に加入し、今回が初の学会参加でした。前から看護の歴史に興味を抱いていましたが、具体的に私の周囲には看護史の研究者が存在せず、東京大学の看護史の授業は基礎看護学担当の教授が資料を掻き集めて、苦勞して講義されていました。そうしたことから、日本の看護史研究者の話が聞けると期待して学会に参加しました。

看護の将来を見通すという今回のテーマから、これからの看護に焦点が当てられていたようですが、看護の歴史というものが、これらの看護の方向性を示唆すべきツールであるという位置づけを理解できたように思います。「温故知新」(古きを訊ねる、温める)ということはなかなか実践しがたいことであり、その意味でも、この学会の発展が期待されるべきであると

思います。

初日に目をひいたのは、自由集会のオーストラリアの看護・介護についてのレポートでした。参加者はそれほど多くありませんでしたが、発表者も含め、様々な視点から多くの質問・発言があり、楽しいひとときを過ごせました。

二日目の研究発表では、神居さんのような仏教者の発表、沖繩の准看護婦制度の発表など、滅多に聞けないもので、有意義に思いました。昼食を兼ねた懇談会の場では「歴史ある」先生方にも接することができ、面識のなかった先生方の姿を拝見でき幸いでした。改善すべき点もあったようです。



が、特に思いつくことは発表の本数が少なかつたことです。これを改善するためには、私自身が来年度何らかの研究発表を行うことが必要です。なにができるかわかりませんが、今後ともよろしくお願ひします。

アメリカ看護歴史学会見聞記

福本 恵

ひょうたんからコマ、今回のアメリカ行きはそんな感じでした。最も、根本的な課題は各自潜在的に持っていたところに条件が整ったので決断が早かったというところでしょう。

メンバーは高橋みや子さん、依田和美さんそして大西真由美さんと私の四人です。

ところで、当日、私たち四人の参加がちょっとした話題になっていました。なにしろ参加者が二百人足らずの小さい学会だったのと過去に日本のナースはライダー・島崎玲子さんなど数人の参加があったのみでしたのでよけいに目立ったようです。ちょうどGHQの占領時代のオルソン女史の日本の看護改革に果たした指導評価に関する研究報告があり、これが私たちの関心をひいたのではないかと噂されていたようです。この報告をな

